
メッシュ・ザ・タヌキ

nakoso

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メッシュュ・ザ・タヌキ

【Zコード】

Z3628D

【作者名】

nakoso

【あらすじ】

いつも通りの日々。いつも通りの帰り道。『その日』、帰り着いた俺の部屋には、宇宙からやって来たタヌキがいた！？

バイトを終えてから家に着いてドアを開ける。居間に入った俺は、一瞬にして頭が白くなつた。

……どうしてタヌキがいるんだ？

六畳の居間に、一匹のタヌキがいた　のだが。

……どうしてオレンジの毛なんだ？

そいつは姿はタヌキそのものだが、毛がオレンジ色という、見た事もないヤツだった。

「おひ、お帰り」

熱心にテレビに見入っていたタヌキが振り向いた。

「タヌキがしゃべつた」

「石岡信くん。いつまで突つ立つてるんだ？　まあ座れよ」

「しかも俺の名前を知ってる」

「ところでこのお茶、シケつてるんじゃないかな？」

ガラス板のテーブルに置かれた茶碗を器用に右手（足？）で持ち上げる。

「何様だおまえ」

「何様とは失礼な。」この状況で驚くのは仕方ないが、もつ少し口を

慎め

「タヌキから命令口調

「そう落ち込むな」

「……疲れてるな俺。きっとバイクのしそぎだ。きっと帰り道の電車だ。早く起きなきや。寝過ぎしたら終電なくなつちまつわ」

「水でも飲みな」

ぱんつ。

台所で「ンソ」「ンソ」やつていたタヌキが、コップ手に俺の足を呪いた。

タヌキを見下ろす。一足歩行で立つタヌキの背丈は、ちよつて俺の腰辺り。

「脊椎の具合は平氣か？ おいタヌキ」

「飲めつて」

勧められた水を何も考えずに飲んで 吹き出した。

「熱つ！..」

「さやねはねはね.. 湯だよ湯！ 水だと思つたらとんだ勘違つ！..」

ざまあ。

「あちあちあちあちあちーー..」

笑い転げるタヌキの上にコップを引つくり返したところ、悲鳴こ
変わつた。

「あちいだろ！？」

「つてゆーか、おまえは何だ?」

のた打つタヌキの睨みを俺は余裕で見下ろす。

「見てわかんねえのか？」

本気で言つてるのか、こいつは。

コホン。タヌキは咳払いを一つして、テーブルの脇であぐらを搔いた。無言のまま、テーブルを挟んだ座布団を指す。

座れ　といふ意味らしい

の暗示だ？

それとも、これは幻覚？
疲労が限界を超えたか？

ろした

爆笑中のタヌキに無言で座布団を投げ付ける。

卷之三

顔面に座布団を食らった夕又ギが、勢いで壁に後頭部をぶつけた。

……まあ、なんだ。俺が何者なのか、まずそれを教えなきやな」

涙目で頭をさすりつつ言うタヌキ。俺は尻の下の、すつかりペシヤンコになつたブーブークッショーンを投げ捨てた。タヌキは真剣なまなざしで、こう告げた。

「俺は宇宙人なんだ」

「ちやぶ台返し。
ごつ。」

しかしテープルは壁に衝突しただけで、タヌキは素早く逃げおおせた。

「地球人は野蛮だな」

「ロロ、ロロと転がつたまま、タヌキが言つ。」

「タヌキだろ、おまえ
「宇宙人だつて言つてるだろ？」
「全身オレンジ色のタヌキだろ？」
「何を言つか！」

急に声を荒げて、タヌキは拳（前足？）で畳を叩き付けた。わからづらいが、七、八本の眉毛が吊り上がつてゐる。

「これを見てみろ！」

おもむろに立ち上がつたタヌキが腹を指す。
3～4センチの一筋の赤毛。

「何それ
「見ての通りだ」

もしかして。

「……メツシユ？」

「すぐにわかれ。つたく、地球人は流行が遅れてやがる」

タヌキの分際で舌打ちなんかするし。

「それ、流行つてんの？」

「若者に大人気」

前足の親指を立てるタヌキ（自称宇宙人）。

「ダセH」

率直な感想を述べていたらタヌキはたいそう立腹したようで。

「わかんねえかなあ。男なら見えない所にこだわるのがオシャレだろ？」

ちょっと高い所に手を伸ばしたり、腕組みを解いた時に見える二筋の赤い毛 世の女は右から左までメロメロよ。

見たところ、地球人にはファッショニ性が見られないな。侵略・征服の曉にはそこから何とかしないとな

タヌキはどこまでもマジだ。

「男だつたのか」

「女に見えるか？」

「メロメロか」

「腰碎けよ」

「侵略？」

「そう」

「征服つて？」

「俺の目的

付き合にきれない。

『コロンと俺は横になり、テレビを見る事にした。

『 本日未明、 市在住の主婦』

ぶつつ。

突然真っ暗になつたブラウン管に俺と、リモコンを持ったタヌキ
が映る。

「やめてくれる?」

「話を聞け

ぴつ。仕方なく、俺はテレビのスイッチを直接押した。

『 田島直人(29)を容疑者として』

ぶつつ。

「.....」

また消され、タヌキを睨む。

「話を聞け

スイッチを入れる。

ぴつ。

『 中央高速道路を走行中』

ぶつつ。

ぴつ。

『トラックが家屋に突入し

ぶつつ。

ぴつ。

『パレスチナは今、かつてない熱氣に包まれ

ぶつつ。

ぴつ。

『容疑者は未だに意味不明な

ぶつつ。

ぴつ。

『川の中に捨てられた凶器を探しており

ぶつつ。

ぴつ。

『どうだい、腹筋が火を噴き始めたりう?

ぶつつ。

ぴつ。

『判定! 黒!

ぶつつ。

ぴつ。

『週3～4ですね

ぶつつ。

ぴつ。

『と供述している

ぶつつ。

ごすつ。

我慢の限界に達した俺は踵でタヌキを蹴飛ばした。
巧みにチャンネルを変えたり小技利かせやがつて。

「聞いてくれよ話を」

泣いてるし。

一際でかいため息をついてから、とつあえず付合つてやがつと
決めた。

寝よつとじても、じつはジャマイカだらう。いつなつたら云が
済むまで話をとねりやが。

「んじゃあ、まづ……ただなん、どの星から来たんだ？」

「俺の星が知りたいか！」

やおら元氣になつたタヌキ。

「知りたい知りたい」

せしてやる氣のない俺。

「地球で言つ北極星つてあるだろ？」

「ああ、あるねえ」

「あれのとなじ」

「わかるかよ」

「あ、左隣り」

べい。

「……本當なんだつてのこ」

頭のてつぱんの「づ」をさすつりつ、ふてくされたタヌキ。

「じゃあ、地球に来た目的は？」

「侵略と征服」

「こんなところで茶あ飲んでえ？」

「下見だよ、下見」

口の左端を吊り上げ、不敵なつもつらしき。

「どうして征服なんかすんの？」

「愚問だな」

「寝るわ」

「まあ聞けつて」

そそくせと立ち上がりつとした俺の肩に獸の手が乗つかる。

「地球はな、ずいぶん昔から俺らに監視されてんのよ。

その間に見るに堪えないほど廢れて來たし、ここでは唯一住みやすい星が危険に瀕している。ここで俺の登場だ！」

星を汚す生物を絶やし！ 元来の住みやすい環境に戻す！

そして酒池肉林！！

「飛躍したな」

「ビバ ハーレムー！」

びろりろりんつ

「敵襲！？」

「メールだつて」

突然慌て出したタヌキを一殴りしてから、ジーンズのポケットからケータイを出す。

「女か」

液晶に映ったメール画面を脇から覗き込むタヌキ。

「バイトの友達」

「女の名前だな」

「ジャマ」

首根っこ捕まえてタヌキを放つてから、俺は短いメールを読んだ。

『おたがいにバイトおつかれっ。今度あそぼ（はあと）』

相手は「」下で、気が合つた。ただいまフリー。

惚れてる。

思わず握り拳。

「告れ

「わあーー！」

額にでかい「」をされたタヌキがいきなり顔を寄せた。

「チャンスだぞ、信！ 他のヤツに盗られる前に奪え、信！ 幸せ

な恋人生活だ、信！

「気安く名前を連呼すんな！」

めりつ。

顔面に蹴りを入れる。

「……気安く蹴るな」

あらぬ方向へ曲がった鼻を直しながら、涙目のタヌキ。タヌキは居住まいを正すと咳払いを一つして。

「そこに正座しろ。俺が男女関係つて一毛んを説いてやる」

二二一

「タヌキから何を教わんだよ?」

「二〇キロ、刀又、一ノギ

「男女關係」

「アホくさ

「すこと居座るぞ」

それま困る。

しかしタヌキの前で正座つてのもシャク。
俺は手近にあつた座布団を引き寄せると、その上にあべぢをかい
た。

ブウウウウウウウウウウウウウウ

このままで

！ 座布団じや なくとも座れんだろー

え！？ 放屁野郎！ こいつ、あつたまワリイ！！

かくして、堪忍袋の緒は切れた。

「ほんの……タヌキいいいいいいいいいいいい」

座布団を思い切り振りかぶつた　　その時一
カツ！

「うわっ！？」

いきなり窓の外から金色の光が激しく差し込んだ！
あまりの眩しさで田の前が真っ白く……！

「やべっ、時間だわ」

強くつぶつたまぶたのせいでタヌキがどんな顔してるのか、さつ
ぱり見えない。

「はーー？」

「だから帰る時間。門限ついせーんだよ」

帰る時間？　門限？

「んじゅ、また来るわ」

また……来る……？

「てか来んなよー！」

……あれ？

金色の光が消え、目を開くと　俺の指は何もない壁を指してい

た。

部屋には俺だけ。他には誰もいない。
テレビから出るバラエティ番組の笑い声が響いて消える。
寒い 窓が開いているのに気付いて、閉めた。

何もなかつた…のか?

ふと。

畳に落ちていた赤い毛を一本、見つけた。

テーブルの上にあつた茶碗からは、まだ湯気が上っていた。

あれから三ヶ月。タヌキの姿は見ていない。
もしかしたらただの夢だつたのかもしれない。

どっちにせよ、いなくなつてもらつて助かった。うるせーんだよ、
あいつ。

ま、体験が体験だけに、一切他言していない。
てか、できねーだろ。

赤のメッシュユ入れたオレンジのタヌキ（自称宇宙人）のおかげで
告白できただんだ なんて、彼女に言えやしないんだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3628d/>

メッシュ・ザ・タヌキ

2010年11月11日19時18分発行